

叢說

蘭書譯局の創設

文學博士 新村 出

工部大學校に合して帝國大學と改稱した舊東京大學は、明治の初年に大學南校と稱へてゐた東京開成學校（法文理の三科を含む）と大學東校と稱へて居た東京醫學校との二校を合併したものであるが、更に遡るとこれら二校のうち前者は開成所から、後者は西洋醫學所から發展したもので、即ち安政年間に設けられた蕃書調所と種痘館とが文久年中に至つてそれぞれ開成所となり醫學所となつて斯くの如く段々改進し來つたものである。されば舊東京大學の淵源は、昌平校よりする一流を除けば、以上の二大源流に出づるものと見るべきで

ある。而して蕃書調所は、もと幕府の天文臺中の一局たる所謂蘭書翻譯局の獨立したものと見做さざるを得ないけれども、種痘館の方は漢方醫の機關たる醫學館寛政三年を経て疇壽館明和二年まで直接に遡ることは出来ない。漢學者の淵藪であつた昌平坂學問所と洋學者の據つて居た蕃書調所とが對立して居た様に、漢方醫の醫學館は蘭方醫の種痘館と互を持して下らなかつたのである。各兩派の對峙は兩派の關係と共に近代の學術史上面白い事柄であるが、ここで拘らふ暇がない。ただ茲では同じく蘭學系統より出でて天文地理の學派より起つた一譯局と、醫術本草の學派より起つた一學館との對照について遠くその由來を考へつゝ、主として蘭書譯局創置の顛末を説き、附するに同局沿革の大要を以てせんとするに止める。

姑く砲術騎術等と繪畫手工等を除くときは、鎖國時代の蘭學には天文地理の系統と醫術本草系

統との二つがある。その間蘭語に達して西學の智識を得んとするものと、語學に據らずして新學に親むものとの別があり、江戸の學徒の如く語學に疎くして、専ら智識の實質を求むるに急なるものと、長崎の譯官の如く語學に長じて通辭の傍ら蘭書の翻譯に従事して西說の傳播を介するものとの差があるけれども、以上の如く天文地理系統の蘭學者と醫術本草系統の蘭學者との對立は認めて置かねばならぬ。二系統中いづれが早く進歩したかといふと、醫術本草の方であつた。それには學問の性質も一つは手傳つて居るが、其他方には醫術の方には長崎の出島蘭館に滯留する蘭醫との接觸に由つて少しづつでも早く進歩することが出來たのであつた。之に反して天文の方は舊式の漢譯西洋天文學說でさへ享保五年までは禁じてあつた程で、切支丹の宗旨同様な取扱を受けて居た。南蠻流の外科醫術は別段禁制せられたことはなかつたが、天文說は明末清初支那に入つた宣教師の譯書が主であつたから、所謂袈娑まで憎むの類で禁止されてゐたのであつた。それはまだしもであるが、享保五年將軍吉宗の禁書の一部解除以後は、今迄沮止されて居た西洋天文地理の漢譯書がさも新學說の様に受け取られ氣味で、その舊式な吉利支丹學藝の遺物たることは全く知られずに居た、時代後れの陳腐なるものとは氣がつかなかつた。ともかくこの解禁は結構な處置とするに足るが、之を以て直接に新學術輸入の路を開いたものとするや大に違ふ。これが縁で西洋の學術渡來の端緒を得たといふに過ぎぬことを忘れてはならぬ。從來舊式の西學の入る門戸をすら閉ぢて居たものが、とにかくその門戸が開けたといふ丈である。況んやこの解禁は西洋書閱讀の禁止を解除したといふ意味ではないのである。寛永七年の禁書令は、前述の如く西教又は西學の漢譯された物の輸入傳播

を恐れた爲であつたので、決して蘭書の輸入を禁じ閱讀を咎めては居らぬのである。洋學史家は往々この點を考へ違へてゐる様である。蘭書の輸入は寛永以後享保以前に於て二三の實例がある。無論一般學術の開けなかつた時代、即ち研究家の輩出しなかつた時代のことであるから各種の學術書が何人の手にも渡るやうに頻繁に輸入されたといふのではない。無論限られた狭い範圍の用に供せられる爲に外ならなかつた。Montanus A. Moennanus の日本使節記によれば、一六五九年(萬治二年)和蘭甲比丹ワールヘナール N. Wagenaar 參府の節、老中稻葉美濃守^{正則}にドドネウス R. Dodoneus の本草書を送つたことがある。徳川實紀によると、その四年後に當る寛文三年(一六六三)には甲比丹參府の時、阿蘭陀繪大小二十一枚と共に阿蘭陀本草一冊を献じたとあるが、當春在留參府の甲比丹はインダイク H. Indyk と呼び、其名を以

て進献せるヨンストン I. Jonston の本草書(一六六〇年刊本)現に東京帝國大學圖書館に藏せられてある。これは後年いはゆる蘭學開始期に官醫野呂元丈が翻譯の命を受けて蘭人及譯官に大意を抄譯せしめた其原本と思はれるのである。前田松雲公^{細網}が蘭人から阿蘭陀本草書を取寄せたのは、右の寛文三年から二十年も後なる天和二年(一六八二)であつた、それはドドネウスの本草書であつたらしい。右の如くいづれも本草書に限り、而も將軍執政諸侯への渡來であつたが、西籍輸入禁止の沙汰は決してなかつたといふ證據になる。これらの書物も研究用といふよりは寧ろ玩弄物であつたことは、Montanus の記事を讀んで見てもわかるが、とにかく蘭書渡來の道は開けて居たのである。醫書の方ではパーレ^レA. Palle の外科醫書(一六四九年の蘭譯本)を元祿年中、檜林鎮山が得たことは富士川博士の日本醫學史で知られて居るが

、其本は現にこれも亦東京帝國大學圖書館に傳はつてゐる。斯くの如く醫術本草學の書は、天文地理の書よりも早く原書として日本に入つた。但しそれで直に前者が後者よりも進歩してゐたといふ證明にはならぬ。舊式ながらも漢譯本の西洋天文地理書の方が蘭文の書物より蘭語學未開の時代には直によく了解される筈で、説の比較的新舊は其頃の學徒には同じ價値と認められるからして、その舊式の天文説とて相當と重んぜられたものである。曆算全書の謄寫などが吉宗の命で建部賢弘等の手によつて出來たのが一例である。本元の西洋では學術が新陳代謝したにも拘はらず、日本では陳腐な所を取込んで居たこと、殊に支那でも舊式ながら西洋の天文數學等がそれ相應に進歩し更に乾隆帝の曆象考成後編なども出るといふ際に、日本ではやつと支那の古い譯述書を輸入して喜んでゐたことは今日から見ると尙瘁い。然るに醫術の

方では南蠻紅毛系統の醫師が割合に古く幕府に登用されて居る、西川如見、盧草拙の如き天文學に造詣ある長崎の學士を江戸に召んだよりも少し早く和蘭醫學の端緒は江戸幕府の裡に見出されたのであつた。斯くて西川如見の天文書に西説を見るよりも一時期以前に蘭方外科の書は出版されて居る。栗崎道有(元祿)桂川甫筑(享保)等幕府の醫師として蘭醫に醫藥の事を尋ねたことなどは、幕府にあつては天文學者に先んじて居る。

長崎に於ては儒生北島見信が蘭書をも參考して編述した紅毛天地二圖贅説は元文二年に着手し江戸に於ける青木昆陽野呂元丈の所謂蘭學開始の時期よりも早きこと數年であるから、正に破天荒の著とも稱すべきである。江戸蘭學の開始では言ふまでもなく語學に盡瘁した昆陽の方が、單に本草書の和解翻譯の事を幹した元丈よりも功績が顯者であるが、昆陽もやはり本草學を主にした形跡の

明かなことは、その譯述書なり昆陽漫録なりの上で窺はれる。即ち彼は經濟的の側から蘭學に志したとも、又主として經濟的の方面の研究をしたとは断定しねないのである。下つて寶曆明和安永の時代に及んで、田村元雄、平賀源内等の如き本草家、前野良澤杉田玄白等の如き醫家の輩出する頃に至つては、蘭學は全く醫術本草系統の徒の専有たるかの觀があつた。安永五年參府の蘭醫を粧へる瑞典の學者トウンベルグ K. P. Thunberg の稱嘆を博した蘭學界の麒麟兒桂川甫周中川淳庵も醫學本草學の徒に外ならなかつた。漢方には多紀氏の躋壽館の設置があつて、而もそれが神田（佐久間町）の司天臺の址に立てられたと云ふのは、何やら當時江戸に於ける醫家の勢が微々たる天文家を凌ぐ事實をシンボライズしたものと感ぜられる。況んやこの時分は洋學史家のいつも特筆する解體新書（天明三年刊）の出版があつた時勢である。

然し同時代に於て、天文學者が後年寛政以後に至つて一大飛躍をなすべき素地は作られつつあつた。貞享曆を補つた寶曆曆の不完全になつた頃、神田佐久間町の天文臺を廢した頃は、元祿享保の盛運にひきかへて天學の不振其極に達したが、やがて長崎に志筑忠雄の生れた寶曆の末、大阪に高橋至時の生れた明和の初の程からは、再び衰勢を挽回する時機に際會した。明和元年に佐々木文次郎（吉田秀長）が天文方に登用されてからは、斯學革新の機運がほのめき、翌年には補曆要務の爲に上京し、歸府後測量所を牛込薬店に設けて廢止した天文臺の復興をし、四年後の明和六年には修正寶曆甲戌曆法十冊を進獻するに至つた。此頃よりは相良侯田沼意次が老中の時代で、蘭學事始にも見ゆる様に、種々の機械が半ばは研究的半ばは玩弄的に輸入され同時に毎年參府の蘭人の旅館には官醫と天文家とが出入して質問や修業に熱中した

一時期であつた。安永五年の春參府した蘭使附のトウンベルグの紀行によれば、江戸滞在中の來訪者は天文方二人と醫師五人とであつて、前者はサカキ・ボンジン Sakaki Bonjin 即ち前記の佐々木文次郎(吉田秀長)とスブカワ・スロー Sudukawa Suro 澁川四郎(?澁川主水正清?)とであり、後者の中の優なるは桂川甫周中川淳庵の二人であつた。トウンベルグの記す所を見るに、日本では天文学は非常に尊重されては居るが、それにも係らず支那や和蘭の曆書アレキサンダリクなくしては曆を完成し又は日月の蝕時を精確に測定する事が出来ぬ有様にあると評して居る。然し、西洋天文学の影響が益、入つて來たことが之に由て明かに知られる。江戸に於てのみならず、長崎に於ても天文学の研究は勃興し、殊に譯官本木榮之進が命を奉じて種々の天文書を譯出するに至つたのも丁度安永三年以來のことで、豊後の三浦梅園が同港に遊歴見學した際

譯官吉耕雄牛の家に天地二球や望遠鏡を觀たり、同じく名高い通詞の松村君紀に就いて初めて地動説を聴いたりしたのは同七年のことであつた。麻田剛立が豊後から大坂に來住したのも明和の末年であるから、安永時代は日本の天文學史上からも、最も注目すべき一時期を畫すると云ふべきである。曆象新書を著はしてニュートンの新學説を祖述した崎陽の英俊志築忠雄が、學に志したのもその頃であつて、矢張り本木氏の門に出でて居る。天文方吉田秀長が牛込の測量所が觀測に不便であるといふので、之を淺草片町に移したのは天明二年十月であつた。この新營の天文臺は公けには須曆所と呼んで居た。然るに其翌年の日蝕の江戸大阪兩地の天文學者の説が相違した所が、大阪方の説が當つて江戸方は面目を失つた。この時分から大阪の天文學は天下に信憑を博するやうに進んで來た。百年前京都の舊派の天文學が江戸の澁川

春海の新研究に打破された以來、斯界に痛快な出來事は寛政年度に於て大阪の天文家を江戸に登用して改曆を完成したことである。阪地學者がこゝに達するの素地はこの安永天明時代に造られてゐたのであつた。

二

寛政の改革に方つて學術機關の革新及新營には先づ同三年多紀氏の躋壽館を官立に昇格させて醫學館と稱した事を始めとし、同五年堀氏の和學講談所設置を許し後(同七年)之に幕府の保護を與へたこと、同年昌平校の學制を改正し更に同九年之を官立にしたことを算へ立てられるが、元より幕府の經營に成つた天文臺に於ける事業も亦同じ機運

に動かされて目覺ましい活動を始めた。予輩はこれらの學術經營の當局に松平定信あると同時にその蔭に隠れて、主として獎勵の任に當つた參政堀田正敦(堅田侯攝津守)の居たことを忘れてはならぬ。こ

れらの學術機關は若年寄支配であつたから、正敦の如き好學の政治家を永く其總頭に戴いて居たのは幸福といはねばならなかつた。

柴野氏を京都より(天明八年)徵し、尾藤氏を大阪より(寛政三年)徵した幕府は、寛政の初に京都の名醫福井楓亭を舉げて製藥所を監せしめ、其の末年には老年の小野蘭山を招いて本草を醫學館に講せしめた様に學界の遺賢を江戸に集むるに力を盡した。大阪より麻田氏を聘せんとして成らず、高足たる高橋氏を始め間・足立等の英才を抜擢して天文臺に入れたのは、寛政の七年春であつた。其年東岡高橋は天文方となり、伊能忠敬の如きも江戸に來り之に就學することゝなつた。

江戸の一般蘭學者については姑く言はず、幕府に於ては桂川甫周が官醫として父祖の遺業を繼ぎ自身も語學を能くし、醫術の外に世界の地誌にも通じ、又蘭學者の保護にも當つて居たが、寛政五

年には幕府は新に醫學館に外科學を置いて甫周を教授に任じた。西洋外科學の位置は是に至つて公認せられたわけである。然し之に反して同じ歳に藩醫宇田川玄隨がゴルテル内科書を譯して内科選要と題して出版して、桂川多紀の新舊兩家の序文をも添へた程であるが、桂門の吉田長叔がいざ内科蘭方を實施せんとして師甫周に破門された様な事件もある。要するに外科は多年の歴史もあり外的手術に過ぎぬから、之を公許したけれども、内科に至つては未だ容易に西洋の新學術を容れなかつたので、急進家は厄に遭はざるを得なかつたのである。西洋内科を幕府で公然採用したのは安政五年にあるので、それまでは主として外科のみが幕府では許されて居たのである。然し幕府以外では蘭方醫學は決して保守的ではなかつた。かゝる時代に幕府の天文學は長足の進歩を遂げてしまつた。

寛政改曆の命が吉田秀長、山路徳風及高橋至時に下つたのは同八年の八月であつた。總裁には老中の松平信明と若年寄の堀田正敦とが任せられた。三人の天文方は同じ年の九月に例に由て上京し、又十一月には大阪より足立左内を京都に召出して高橋の手に附け、爾來一年間の測定を経て翌年十月に寛政改曆の事業が成り、延享以來五十年間の宿案を決することが出來有徳公の遺業を完うせしむることとなつた。改曆に際して天文方が一方には清朝の曆象考成に據ると共に他方には銳意蘭説の研鑽に従事したことは見逃がすべからざる所である。長崎に於ける譯官本木氏の翻譯は固より之に關聯する事であらうが、改曆前後に於て江戸に參府した蘭人は天文家の來訪を受けて質問の應答に忙がしかつたことは、大槻磐水の西賓對晤にも見ゆる通りで、前述安永時代からの引續きである同書に由るに、寛政六年春甲比丹ヘンミーG. He-

mini. が書記ラス Ras 醫官ケルレル Kellar を同
伴して江戸に參府した時、客館には官醫藩醫の連
中と天文方の衆が替る／＼詰掛けて質疑をした記
事がある。五月五日は午前中天文方の佐々木^{田吉}山
路の二氏徒弟を連れて對談したことが明記されて
ある。前日には醫家では桂川宇田川大槻等の名家
本草家では栗本瑞見澁江長伯の如き巨擘が出掛け
た。次回參府の寛政十年にも、天文方の諸氏が醫
員等と同じく押掛けて往つた。蘭使と書記とは前
と同一人であつたが、醫官は代つてレツケ^{Leske}の
の番であつた。醫者に天文の事を尋ねるのである
から元々無理な語であるが、大體の素養の點に於
て相違して居た日本の天文家は、之によつて何物
をか捉へずんば止まざる熱心を有つて居た。

改曆を機として進歩した幕府の天文臺では、享
和三年の春高橋至時^{作左衛門}が初めて所謂ラランデ
^{ラランド}の曆書の原本を手に入れ、七月以降之が

譯述研究に従事し、遂にラランデ曆書管見十數冊
を編するに至つた。長崎で志築氏の曆象新書^{寛政十年}
の成つた數年後の事であつた。その翌年の文化元
年正月早々高橋至時は四十一歳を以て江戸に歿し
四月長子景保^{作左衛門}相續して、年二十歳父の職を
襲うて天文方となつて、大阪より再出仕した間重
富と共に父の遺業たるラランデの曆書の研究を續
けて文化六年に至つた。然るに、この曆局に於て
は改曆後別に新事業が既に起りつゝあつた。その
一は寛政十一・二年頃より始まる蝦夷地測量の業
である。曆局出役の堀田仁助^{龜井隱岐守の臣}が與蝦夷地の
海路測定の爲に出張し、同く伊能忠敬が翌寛政十
二年蝦夷地を實測したことは、事業の發端であつ
て文化年間には伊能の沿海實測の大事業が行はれ
た。東海及中國筋の測量には、至時の次男にして
景保の弟なる高橋景佑^{後に澁川氏を繼ぐ}が同行したこともあ
る。

全國實測の業は、國民の對外思想の勃興に伴ひて起つた自覺心に出でたものと見られる。天明以降全國の旅行及探檢は必ずしも對外心の發達にのみ出でたものではないが、寛政文化の交に於ける地理的智識の進歩は間接に之に負ふ所があると云へよう。全く對外思想より出でたのは、文化三四年起つた世界地圖編纂の業である。これが寛政改曆後に於ける曆局新事業の第二である。この事業を直接に促がしたのは露國の勢力の近接、殊に露國漂流民が海上世界一週をして歸朝した事件である。天明寛政の交より以來二十年間、全世界及海外諸國地理に關する智識が、根底に於て斯る事業の計畫を促がしたことはなつて居るが、直接の由來は右の通りである。大槻磐水等の編著環海異聞の序文(文化四年四月)を見れば、仙臺藩の漂流民が文化元年歸朝した時に、露船より其筋に呈上した世界圖及露領圖の事が出てをるが、參政堀田

正敦は、職掌の上から又實家たる伊達家との關係(伊達宗村の八男にして堀田正富の養子たり)からも、是等の地圖に興味を感じて居たに違ない。遂に翌文化四年十二月四日「天文方高橋作左衛門、林大學頭(通)申談、蠻書を以、地圖等仕立可申旨堀田攝津守殿被仰渡」といふ辭令が出た。そこで長崎から蘭語に達する俊秀の譯官を曆局に招致する必要を感せしめた。當時江戸には之に應ずべき相當の蘭學者を物色すれば其人ないではなかつた。露國及露領の地誌に關して譯述書のあつた前野蘭化は既に歿し享和三年八十一歳増譯采覽異言等の地理書で名高い翻譯家で大槻門下の俊髦であつた山村才助も其年(文化四年九月三十八歳)歿してしまつた。夙に萬國圖說(天明六年)の譯述ある桂川甫周は官醫なれば曆局には向かず、仙臺藩醫の大槻玄澤も亦直に地理書翻譯の業に適するとは云へなかつた。遂に其選は崎陽の譯官中の逸才馬場貞由(佐十郎號殺里)に當つて、翌文化五年三月長崎を出發して出府す

ることゝなつた。時に二十二歳の壯年であつた。

馬場貞由は吉雄永保體之助、號如淵、幸作の末子と共に志築忠雄

中野柳圃門下の雙璧であつた。師志築は譯官出身ながら

も並々の通辭ではなく、文法的研究の根底から

固めてかかつた語學者で、兼ねて和漢の學にも達

し且つ天文數學にも精しく經世眼をも備へて居た

人物であつた。其門下に出た馬場吉雄の兩人が、江

戸と長崎とで互に蘭學者を養成し補翼し、又譯述

の事業に盡瘁した功績を併せて、蘭學史上に特筆

大書すべき價値のある人物である。彼れの最初の

門人であつて、馬場吉雄等を其門に紹介したとい

ふ大槻玄幹支澤の長子にして江戸より留學せりの蘭學事始附記(天保三年)に

よるに、玄幹は志築の事を其父玄澤に報告し、玄

澤より堀田侯に薦め又天文臺の人々にも謀つて江

戸に登用しようとしたことがあつたと云ふ。扨先

生の事を家翁へ申贈りしが家翁さるやんごとなき

御方へ聞へ上げ日官の諸士に謀りて東下せしむべ

き企ありけるも其事ならず、先生も亦遠行せり」と

ある本文の中、自分の推測では「さるやんごとな

き御方」とは玄澤と特別の關係に立てる執政堀田

侯を措いて他に其人ありとも覺われない。唯其企圖

の年代は精しく判らぬが、或は志築(中野柳圃)の歿し

た文化四年頃のことではなかつたかと思ふ。斯う

いふ事情で、遂に馬場貞由が江戸に徴さるゝに至

つた次第である。

曆局に於ける世界地圖補訂の業は、馬場の翻譯

を待て着々進み、一年有餘を経た文化六年六月に

は、田善永田善助、亞歐堂をして銅版に刻せしめて試に出版

することゝなつた。名けて新鐫總界全圖並日本邊

界略圖と題する小形の地圖で、高橋景保の編纂と

いふことにして、大槻磐水の跋を以て出たのであ

つた。これは云はば見本摺に過ぎなかつたので、

翌七年三月新訂萬國全圖成り、矢張り田善の銅版

で、高橋景保及問重富の管轄といふ名義で刊行さ

れた。之は頗る大なる地圖で坊間に時々あらはれることがある。之で此第二の新事業は完成を告げた。この二年間、高橋と馬場とは曆局に於て數部の譯述書を作つた。高橋にはケンペルの日本志第四編を譯した蕃賊排擯紀事(西洋人日本紀事)^{文化五年}があり、北夷考證^{六年}がある。馬場の助力を借りたことは無論である。馬場には同六年に野作雜記と帝魯魯西亞國誌の抄譯がある、共に前年露國來寇の患に方りて譯出したものである。高橋の著譯も亦同じ必要の下から出來たものである。文化五年には馬場の外、本木正榮^{庄左衛門}といふ譯官が江戸に滞留して、砲術書の翻譯を命せられた外、天文臺に於て萬國地圖及西洋軍艦圖解を譯出した様な事もある。然し彼は同年末に長崎に歸還し、馬場の如く永續的の勤務に服することはなかつた。

文化五年十二月二十八日附にて、堀田參政より、天文方に達して蘭書の取扱方を命じ且つ翻譯の技能あるもの、名前を申出づべきことを命じ、右翌六年正月二十八日には、高橋作左衛門への申渡に、林大學頭相調候地誌御用之内、異國に携候義同人申談取調可申」とあるが、段々譯出の範圍は擴張してゆく傾向あるを免れなかつた。それは外國交渉又は外國智識については、長崎とは事かはり、江戸では天文臺の地誌課とも稱すべき部局に於て關係せざるを得なくなつて來るのは當然である。文化六年四月間重富はラランデ取調の御用が略相濟んで大阪に歸つてしまひ、尋いで馬場の助力して居た地圖の方の仕事も一先づ片附いた。文化三年春參府したドウフ Heber の記す所によれば、天文學は曩時のトウンベルグ時代よりは長足の進歩を示し、ラランデの曆書をも備へ成績見るべきものがあることを言つてをる。高橋はド

ウフよりグロービウス *Glorius* といふ和蘭名を附けて貰つたこともある位で、其間柄も親密であつた。かやうに天文地理の學は曆局に在つて進歩したけれど、眞の研究實測は高橋景保一派の手を離れ、天文にては弟澁川景佑等、地理にあつては伊能忠敬等の事業が見るべきものであつた。而して

曆局内に於て將に一部局を形作らんとしたのは、景保貞由等の翻譯局であつて、文化八年に至つてそれが一段進むやうになつたのは、別の理由がある。それは後に譲り、高橋一箇には文化五年來會て露國より寄越した國書の滿洲文の翻譯と之に伴ふ滿洲辭書の編纂とを擔當して居たから、曆局中に譯局が自然に發達するやうになつた起源は、洋學史家のいふ様に必ずしも文化八年にあると見ることは出来ない。吾等はその起源を享和三年若くは翌文化元年のラランデ曆書取調の事業に置くことも出来よう。又文化三四年、(嚴重に云へば)文

化五年以降の世界地圖編纂資料の翻譯に基くとなすことも出来よう。これらの事業は文化六年には完結したと云へるが、これで以て譯局の根底は解體するに至らなかつた。時勢と偶然の事情とがさうはさせなかつた。

三

古く蠻書和解御用吏徵和蘭書籍和解御用厚生新編凡例などといひ、又蘭學局だの譯局だのと云ふ其部局を今便宜上假りに蘭書譯局と題して置いたのであるが、普通その創設を文化八年に係けるけれども、前章に論じたやうに其起源は稍遡るべきである。然し其發展の起因は同年春より着手したシヨメールの百科辭典翻譯の事業にあることは勿論である。抑もシヨメール *Shomere* の百科辭典は大小種々の異本がある、日本に舶載されたものでも各種の本があることは、典籍秦鏡でも知ることが出来る。蘭學階梯天明三年紅毛雜誌天明七年をはじめ諸書に見ゆるが

如く古くから渡來した本であるが、當時にありては決して得易からざる書物として珍重されたのである。文化七年甲比丹ドウフ所藏の一本を銀六貫目を以て幕府に買上げたことが、通航一覽續輯に見えて居る。これは多分翌年から翻譯に着手した其本であらうと思はれる。本書翻譯の由來と譯局創立事情どにつきて、大槻玄幹は蘭學事始附記に次の如く語つてゐる。

佐十郎

○馬場
貞由

を東下せしめて曆局にいれ蘭書

を讀ましめしに、一二年にして長崎より歸し給るべきよし公に請ひ奉る事切なりければ、日官にも策盡て如何はせんとなりし時に余土生玄碩翁○に面會して「シヨメール」翻譯の事を説き佐十郎へ命せられれば其功なりて國益多からん、といひしに、玄碩君其旨をやんごとなき御方○なるべしへ告げまいらせ、頓て「シヨメール」和解御用を佐十郎へ命せられ、終には

御家人にかすまはれけるなり。其○後家翁○大槻も陪臣にして右の和解御用に預り朝請をも命ずる事になりたるは、五十年來蘭學の公學となりし始なり。次て宇田川玄真杉田立卿青地林宗等數人和解御用に預る者といへども、しかゝの故ありて家翁を始とせり。是は土生君の周旋あるに因れり、さて此學の都下にて眞面目を得るは馬場氏より始れり。

幕醫土生玄碩と日官高橋景保とのシヨメール事件に就いての關係は、有名なことであるが、二者は既に文化六七年頃に方つてかやうに譯局創設の際に結付けられてゐたのである。是に於て醫學本草系統の蘭學者は天文地理系統の蘭學者と接近合同することとなつた。さてこの事業は、高橋の經營の才に由て進歩したことは、種々の側から明かにし得るが、殊に前記の書に見ゆる大槻玄幹の記が確かである。

是より先き高橋氏は父の業を繼ぎ伊能氏が日本測量地圖の總裁として又世界地誌の總裁をなすに至れば、通詞を始め蘭學の者を手に屬し日官に預らざる「シヨメール」御用も其手附て勤仕する様になりたり。此人學才は乏しけれども世事に長じて俗吏とよく相接し敏達の人を手に屬して公用を辨せしが故に此學の大功あるに似たり。土生氏は眼科を専門として手術熟練の人なれば、蘭學を信せしより馬場を始め家翁宇氏等其周旋によることありて此道の開くること少なからず。

高橋の伎倆と長所とを遺憾なく盡してをる。さて又記者の父なる大槻玄澤が譯局擴張の案を參政堀田侯に呈した文書は蘭譯梯航後附第二書として磐水存響^乾巻に出てをる。年月は判然せぬが、文化八年の際の書で、馬場に次いで彼か譯員に列した後の事であることは確かである。予輩はこの建議

書を以て、荷田氏の創國學啓および中井氏の建學私議と共に及び稱すべきものと思ひ、和漢洋三學の振興に對する抱負を述べたものとしてそれぞれ尊重すべきものと惟ふ。大槻氏の考によれば、譯局を和學講談所などに倣ひ獨立せしめ、本朝にては大日本史の編纂、寛政諸家譜の重修漢土にては梵文の翻譯、又は清朝の理藩などの様な設備にして、幕府で保護してゆくがよいといふのが、主張の大體である。土地の選定やら部局の分科やらにまで論及し且つ清朝の理藩院の如くに外國交渉の事を取捌くやうにしたいと云ふ抱負をも述べてある。而して蘭學をなす者は必ず本局の許可を受けらるやうにせねばなぬと取締方をも擧げた。法政理財文藝等の事は擧げてないが天文地理數學博物醫療工學及砲術等に涉る今日の理科醫科工科の類の學問を語學と共に攷究しようといふのを以て目的とした。されば譯局創設期に於ける大槻氏の抱負

は、數十年後の蕃書調所又は開成所あたりの設備を豫想したのであつた。非常に時勢に先んじて居たものである。堀田侯の明を以てしても未だ俄かにその實現を望まれなかつたのは、無理もなかつた。

さて譯局發展の動機になつたシヨメル百科辭典翻譯の業は、文化八年三月に起り、何年まで繼續したかわからぬ。然し十八年後の文政十二年、高橋景保が獄中に歿した時、天文臺譯員より同書の翻譯には作左衛門加はり居らざる由を其筋に申出てをる年譜所から察すると隨分長く繼續してゐたことがわかる。幕府より静岡藩の學校に引繼がれて現に静岡の師範學校の書庫に残る厚生新編の稿本百數十冊は即ち右シヨメルの翻譯された成果である。譯者の姓名を録してある巻もあり、譯員の交替等も或程度まで知られる。馬場貞由等の序文によつて本書の來歴もわかるが、餘白が乏し

いから紹介を略する。同書の翻譯は最初文化八年三月馬場に命せられ、間もなく五月に大槻をも加へられたのであつた。その以後譯員の數も殖む、事業もシヨメル以外の書にも及び、又譯員の或者は北海に來た露艦との交渉、東海を音信づれた英船との應接なども司り、其時其節の翻譯及通譯に當つたことが數々あつた。殊に高橋馬場の事業は譯局初期に於て最も光彩あるものであつたが、創設以後の事蹟並に沿革は一切之を他日に譲ることとする。文化八年(一八一)より起算すれば蕃書調所の成立する安政二年(一八五五)に至る四十五年間の譯局の變遷と高橋以後の經營者、馬場以後の翻譯者及通譯者の事蹟は、別稿に詳かにする機會を得たいと思ふ。(大正二年十月史學研究會に於ての講演「蕃書調所の起源と馬場貞由の翻譯事業」の稿案を修訂す、大正五年六月)